

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02160

研究課題名（和文）研究方法論としてのインクルーシブアプローチ 知的障害者との協働研究の検証

研究課題名（英文）Inclusive Approach as a research methodology

研究代表者

森口 弘美（Moriguchi, Hiromi）

天理大学・人文学部・准教授

研究者番号：10631898

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本において知的障害者を共同研究者（Co-researcher）として位置づけ共同研究を行うインクルーシブリサーチの蓄積が顕著に少ない。本研究では、代表研究者および研究分担者が関わって2018年以降に取り組んだ3つの研究活動を検証することで、方法論としてのインクルーシブリサーチを確立することを目的として取り組んだ。

研究期間においては、上述した研究活動に加え、研究協力者が福祉事業所で行った研究活動について、活動に関わった当事者と共に研究の成果の発表や検証を行った。その結果、方法論の確立には至らなかったものの、インクルーシブリサーチの独自性や方法を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

実際に研究活動に参加した人たちのインタビュー調査やその分析をとおして、どのような要素があればインクルーシブリサーチと言えるのかを提示することができた。そして、インクルーシブリサーチがもたらすポジティブな効果のみならず、研究倫理に関わる事柄を含む留意点についても示すことができた。

障害者権利条約では、障害者が社会のあらゆる側面に参加することが求められている。日本では知的障害者の多くは福祉事業所に所属し、サービス利用者として生活する側面が強いなか、本研究をとおして知的障害者が研究の主体となることの意義や方法を一定程度示すことができたと考えている。

研究成果の概要（英文）：In Japan, there is a remarkable lack of inclusive research that involves people with intellectual disabilities as co-researchers. The purpose of this research was to establish inclusive research as a methodology by examining three research activities that the representative researcher and research collaborators have been involved in since 2018.

During the research period, we presented the research results and verified the research process with the disabled people involved in the above-mentioned research activities and the research activities conducted by the research collaborators at the welfare work center. As a result, although we were unable to establish a methodology, we were able to clarify the uniqueness and the methods of inclusive research.

研究分野：障害者福祉

キーワード：インクルーシブリサーチ 知的障害 セルフアドボカシー ソーシャル・インクルージョン

1. 研究開始当初の背景

従来は研究の対象者であった障害当事者が研究のプロセスに關与する参加型リサーチへの関心が高まっているが、知的障害者を共同研究者 (Co-researcher) として研究のプロセスに位置付けるインクルーシブリサーチは、英語圏に比べて日本ではその蓄積が顕著に少ない。研究開始当初、研究代表者 (森口弘美) および研究分担者 (笠原千絵) は、民間の助成団体による資金を獲得して知的障害者との研究活動に取り組んでいた。また、インクルーシブリサーチについて先進的に取り組む英国の研究グループとの交流プロジェクトの計画も進めていた。そこで、この科研費補助金による研究では、こうしたインクルーシブリサーチの実践を学術的な観点から検証したいと考えた。

2. 研究の目的

研究の目的は、障害者を取り巻く状況を、社会構造を含むダイナミックな視点でとらえ変容させていくことを目指すインクルージョンの発想が、障害者を支援の対象として捉えてきた日本の福祉研究にどのようなインパクトをもたらすのかを明らかにすること、そして、そのことをとおして研究方法論としてのインクルーシブリサーチを確立することである。

3. 研究の方法

本研究の当初の計画では、民間の助成団体の資金を得て進めている研究活動について、研究結果や研究プロセスを当事者とともに振り返り、研究の成果を外部に向けて発信する発表に取り組むこととした。研究活動の一つ目は、知的障害のある共同研究者と共に取り組んでいる「しょうらいのくらし調査」(2018年10月～2019年9月)である(リサーチ)。二つ目は、英国の研究チームと共同で取り組んでいる「ロードマップ作成ワークショップ」(2019年1月～12月)である(リサーチ)。さらに、これらの活動をとおして立案した新たな研究活動として、イギリスの研究者との協働により「ライフストーリーマンガの作成」(2020年8月～2022年3月)を実施した(リサーチ)。本科研費助成事業においては、これらの研究活動の検討(評価・発表)に取り組むこととした。

研究期間中には、上述したリサーチ～のほかに、研究協力者(松田美紀)が2019～2020年度にかけて、福祉事業所に通う利用者3名とそれぞれ個別に研究活動を行った(リサーチ)。

本科研費補助事業の期間の後半は、上述した研究活動を検証するために、改めて「障害のある人たちの研究活動(インクルーシブリサーチ)の検証」と題した研究計画をたてた。この計画においては、上述したリサーチ、リサーチ、リサーチに参加した障害のある当事者(計7名)および研究者や支援者(計4名)に協力を依頼し、相互の活動を紹介し合う発表会およびインタビューを実施した。そして、インタビューデータの検討・考察の結果を、当事者向けおよび支援者向けの2種類のパンフレットにまとめ、さらに論文としても発表することとした。

4. 研究成果

以下、リサーチ～のそれぞれについて、研究活動の検討(評価・発表)の内容について記す。

なお、ここでいう「評価」は、当事者と共に研究活動を振り返ることをさす。何らかの指標や項目をあらかじめ設定したわけではなく、さまざまな具体的な活動を行ったその都度ごとに、振り返って感想を述べ合うような時間をもつ形をとった。

また「発表」については、当事者が主体となって自らの言葉で複数の人たちの前で研究成果を伝える形のほか、研究成果物を用いて複数の人たちと交流をもつこと、さらにこうした研究活動について研究者が検証した学会発表や論文などをさす。

(1) リサーチの検討

リサーチについては、研究代表者、研究分担者が奈良チームと東京チームに分かれて、それぞれの地域の当事者と一緒に取り組んだ成果物がいくつかあり、当事者と一緒この成果物を活用した普及活動に取り組んだ。具体的には、学会での研究討論会やポスター発表のほか、大学の授業などで紹介したり、福祉事業や余暇活動に取り組む団体において、成果物であるカードゲームを使って実際に交流をしたり、別の成果物であるDVDを教材とした研修を行ったりした。

こうした活動の一部について研究分担者が参加者のコメントを分析した結果、知的障害のある当事者の目線や発想で作られたカードゲームを使った交流をとおして、障害のない参加者は「知的障害」や「障害者」というカテゴリーや、「支え手」「受け手」といった枠組みがゆらぎ、関係性の変化につながる可能性があることが示唆された(笠原2022)。こうした効果がより現れるよう、知的障害のある人の意見をもとに、カードゲームの新たなバージョンを作成した。

(2) リサーチの検討

リサーチは、英国の研究チームとの研究交流プロジェクトで、英国と日本におけるスタディ

ツアーとセミナーを実施し、インクルーシブリサーチを実践する背景にある知的障害者の置かれた状況の違いや、障害者や家族をめぐる実態を学び合うことで、今後の研究の発展につながるロードマップを描くことを目的としていた。

それぞれの国におけるスタディツアーとセミナーには、研究者のほか、両国の知的障害のある当事者や家族の立場にある人も参加した。当事者が参加することによって、お互いの国における障害者福祉を取り巻く状況をより深く知ることができた。また、実施プロセスにおいて、知的障害のある人にもわかりやすい資料を作成し、わかりやすいプレゼンテーションを行うことで、障害のない参加者にとってもよりスムーズな理解につながることもわかった。

このプロジェクトのキーワード「belong」は、政策上の概念としてのソーシャル・インクルージョンに対して、帰属感のような主観的な側面を含む概念である。英国におけるセミナーでは、インクルーシブリサーチに取り組む知的障害のある当事者が、自らの言葉で自分にとっての「belong」を語っていたこと、その背景にはインクルーシブリサーチの蓄積やそれを支える研究コミュニティの存在があることがわかった。ここから、今後の日本における課題としては、自分自身にとってのソーシャル・インクルージョン（あるいは belong）について、知的障害のある当事者一人ひとりが語れるようになること、またそれが可能になるような組織・コミュニティとの連携を開拓していくことが挙げられた（森口 2020）。

なお、このリサーチ を踏まえ今後の研究の可能性を検討するなかで、リサーチ の構想が生まれ実施に至った。また、2022 年度には国際共同研究への申請にもチャレンジした（結果は不採択）。

（3）リサーチ の検討

リサーチ については、英国と日本でインクルーシブリサーチに取り組む知的障害のある当事者のライフストーリーを、マンガという成果物をとおして多くの人に伝えることを目的とした。日本国内においては、2 か所の福祉事業所で、当事者が中心となって成果物であるマンガを紹介する発表を行った。また、日本の当事者に関しては、自らのこれまでの経験や研究活動について描かれたマンガを、訪問看護師が交替するときの引継ぎ資料のような形で活用したり、大学でゲスト講師に呼ばれた際の自己紹介として配布している。さらに、マンガの続きを自ら作成したいという希望が出てきたことから、写真を使って日常の様子を綴ることで、自らの足跡や心情を表現するなど、本人自身のインクルーシブリサーチの継続的な活動を支える一助となっていると考えられる。

リサーチ の取り組みでは、制作プロセスをとおしたコミュニケーションによってモデルとなる知的障害のある当事者が過去の経験の意味付けやその時々さまざまな思いを言語化することの意義や、マンガ作品の中でキャラクター化されていくことが描かれる当事者本人にどのような影響を与えるかといった作品化に伴う留意点があることに気づくことができた。当初の計画に沿えば、この科研費補助事業によりこれらの点について検討すべきところであるが、研究期間中に十分に検討できたとは言えない。

（4）リサーチ の取り組み

リサーチ は、研究協力者が、福祉事業所に通う当事者（計 3 名）のそれぞれと、当事者が関心をもつテーマについてインタビュー等の調査を行い、それらをまとめた結果を発表するという一連の研究活動に取り組んだものである。

当事者の一人はショートステイをテーマに、住まいの見学やインタビューを行い、ショートステイだけではなく将来の暮らし全般について考えるようになった。別の当事者は、自助具について調べるなかで、自助具を使用することによる二次障害などの危険性があることを発見した。このように、研究活動に携わった当事者にとっては自分の生活や将来において役立つ可能性のある知見を見出すことができたと考えられる。これらの結果については、当事者自身の言葉で福祉事業所内や学会で発表した。

リサーチ については、当事者が取り組んだ研究テーマやその研究結果について学術的な意義を含む研究成果を当事者と共に検討することが研究代表者の本来の役割であったが、研究全体における位置づけや目的を明確にしていなかったため、できなかった。一方、研究協力者が一貫して丁寧な関わりと試行錯誤を続けたことで、そのプロセスにおいて明らかになった知見が多々あった。こうしたプロセスにおける知見については、次項の（5）において検証することとなった。

（5）障害のある人たちとの研究活動（インクルーシブリサーチ）の検証

インクルーシブリサーチの意義や課題を、具体例を交えつつ広く伝えるため、リサーチ 、 の検証に当事者たちとともに取り組んだ。その目的は、日本におけるインクルーシブな研究や活動が少しでも良い形で広がっていくことである。

この検証には、リサーチ に参加した当事者 3 名、リサーチ に参加した当事者 1 名、リサーチ に参加した当事者 3 名の計 7 名、他に、支援者や研究者の立場でこれらのリサーチに参加した非当事者 4 名に協力を依頼し、相互の活動を紹介し合う発表会と、グループインタビューを実施した。インタビューは研究代表者と研究分担者が行い、データの分析は研究代表者が中心となって行った。また、これまでの研究活動の中で、研究者と当事者の力関係の非対称性から、こう

した共同研究が当事者性の搾取につながる危険性を認識した。そこで、研究者ではない立場からの助言を得たいと考え、リサーチを行った研究協力者に対して、アドバイザーとしての参加を要請し、研究計画から結果のまとめまでのプロセスで意見をもらった。

インタビューの分析結果およびインタビュー前後の話し合いをとおして、下記の点を明らかにした。

まず、何があればインクルーシブリサーチと言えるのかというポイントを3つに整理した。すなわち、障害のある人にとって大事な「問い」から始まっていること、一緒に取り組む支援者や研究者の側が、学び変化する用意があること、障害のある人を取り巻く社会に影響を与えることをめざしていることの3つである。海外の論文ではすでにインクルーシブリサーチの定義は示されているが、それらを参照しながら、日本の文脈の中で誰にでもわかるように伝わる表現で整理し直せたことは、日本におけるインクルーシブリサーチの普及の一助になるという点で意義があると考えた。

次に、インタビューデータをとおして、インクルーシブリサーチに取り組むことのメリットや意義として、研究自体の楽しさや、研究したことが自分の生活に役立つなど、研究活動を行った当事者自身にもたらされた事柄のほか、研究活動をとおして周囲の人たちが当事者のことを理解するきっかけになる、当事者の声を社会に伝えることができるなど、周囲にもたらすポジティブな影響が挙げられた。

さらに、インタビューデータをまとめるプロセスのなかで、インクルーシブリサーチを行ううえでの留意点についても検討した。研究を始める場合のテーマ設定やチームづくりにおいては、あくまでも当事者の関心に合わせる必要があること、またスケジュールや費用の工面を含む計画をたてたうえで当事者の同意や了承をきちんと得ること、成果を急ぎすぎたり既存の研究枠組みに当てはめようとしたりせず、当事者のペースややり方に合わせるための工夫をすること、またそれができるような関係性を作ることの大切さ、さらに、当事者の状況や意向によっては、所属する事業所の支援者等、その当事者のことをよく知る人に必要に応じて協力を求めることなどを挙げることができた。

これらの研究結果を公表する形として、また当事者や支援者向けにはパンフレット作成を、研究者向けには学術論文等による発表を行うこととした。

パンフレットは、当事者向けと支援者向けをイメージした2種類を作成した。当事者向けとしては、インクルーシブリサーチの説明や基本的なやり方、写真やイラストを使った取り組み例をできるだけわかりやすい表現で紹介する4ページのパンフレットを作成した。支援者向けには、インクルーシブリサーチの3つのポイント、メリットや意義、研究者や支援者が気をつけるべき留意点等について、ケーススタディとともに紹介する8ページのパンフレットを作成した。

今後、このパンフレットを使って、インクルーシブリサーチの普及・啓発に取り組む予定である。また、研究結果をまとめた論文については、研究期間内にできなかったため、今後1年以内に発表する計画である。

なお、インクルーシブリサーチの留意点について検討するなかで、研究協力者(アドバイザー)から倫理的課題について指摘を受け、次のような点について検討する必要性が明らかになった。

研究者が知的障害のある当事者に対して研究計画を説明し、当事者から同意や了承を得ることは必要なことであるが、それが形式的なものになり、当事者性の搾取が行われていた場合に当事者が気づかない、あるいは言えないという事態は容易に起こり得る。また、当事者の生活や人生に関わるテーマを研究課題にすることで、当事者の気持ちの揺れやこれまでにない行動を喚起する可能性についても考える必要がある。さらに、本研究は大学の倫理審査を受けたものであるが、当事者が参加しアクションリサーチの側面をもつ調査では、当初想定していなかったことが起きる可能性もある。研究に参加する人たちの知的障害という特性に留意すれば、より丁寧な説明や当事者の意向の確認が必要であり、研究の進め方や実施体制について今後の詳細な検討が必要である。

参考文献

- ・笠原千絵(2022)「『知的障害って何だろう?』という思いが強くなりました:知的障害者とノが行うインクルーシブリサーチの成果普及による問いかけ」『上智大学社会福祉研究』46,22-41
- ・森口弘美(2020)「ソーシャル・インクルージョンを実現する実践戦略としての belong の検討」『天理大学社会福祉学研究室紀要』22, 15-24

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 笠原千絵	4. 巻 46号
2. 論文標題 「知的障害って何だろう？」という思いが強くなりました：知的障害者とノが行うインクルーシブリサーチの成果普及による問いかけ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 上智大学社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 22-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森口弘美	4. 巻 138
2. 論文標題 「人々とともに」を実践するソーシャルワーク：インクルーシブリサーチの試みをとおして（特集 日本のソーシャルワークは今）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 44-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森口弘美	4. 巻 22号
2. 論文標題 ソーシャル・インクルージョンを実現する実践戦略としての belong の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 天理大学社会福祉学研究室紀要	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森口弘美	4. 巻 21巻1号
2. 論文標題 インクルーシブリサーチから見えてきたこと：対象者を探すのではなく、興味をもつ人と協働する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福祉のまちづくり研究	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18975/jais.21.1_36	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 笠原千絵	4. 巻 21巻1号
2. 論文標題 "プロセス"そのものがもたらす研究成果:知的障害のある人が / と自分たちのやり方で行うインクルーシブ リサーチ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福祉のまちづくり研究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18975/jais.21.1_40	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 笠原千絵	4. 巻 43
2. 論文標題 知的障害者にとって『訓練』はいつまで必要なのか: インクルーシブリサーチの実施に向けたトレーニング の位置づけ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 上智大学社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 51-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 太田啓子	4. 巻 21巻1号
2. 論文標題 目の前の当事者に「向き合うこと」からインクルージョンへ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福祉のまちづくり研究	6. 最初と最後の頁 44-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18975/jais.21.1_44	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 水田篤紀・松田美紀
2. 発表標題 良い面も悪い面もある自助具 衰えたときのために今のうちから・・・
3. 学会等名 アートミーツケア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森口弘美、中西正繁
2. 発表標題 共同研究からアドボカシーへ 『しょうらいのくらし調査』成果物の考察
3. 学会等名 アートミーツケア学会（ポスター発表）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森口弘美
2. 発表標題 知的障害のある人と社協との協働の提案 本人リサーチャーとのインクルーシブ調査から
3. 学会等名 近畿地域福祉学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森口弘美
2. 発表標題 シンポジウム「参加と協働が内包する諸課題～異なる立場からの問題提起」- インクルーシブリサーチを推進する立場から-
3. 学会等名 日本福祉のまちづくり学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森口弘美
2. 発表標題 A trial of inclusive research as a movement
3. 学会等名 インクルージョンとBELONG（イギリスと日本の交流セミナー）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笠原千絵
2. 発表標題 大学へのインクルージョンと調査研究における参加・協働
3. 学会等名 日本福祉のまちづくり学会（研究討論会：福祉のまちづくりとインクルージョン 青年期の学びの機会に着目して ）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中弘美
2. 発表標題 Participation and influence of citizens in policy-making in Japan.
3. 学会等名 Seminar of UK/Japan inclusive network exploring intellectual disability and belonging（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笠原千絵
2. 発表標題 Impact of collaborative learning programs for people with learning disabilities and university students: realizing an inclusive society
3. 学会等名 International Conference On Comprehensive Education (ICCE)（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ケアを考えるネットワーク
<http://caringsociety.net/>
 ケアを考えるネットワーク / インクルーシブリサーチ
<http://caringsociety.net/works/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	笠原 千絵 (Kasahara Chie) (60434966)	上智大学・総合人間科学部・教授 (32621)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松田 美紀 (Matsuda Miki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 障害のある人の生活とアドボカシー（イギリスと日本の交流セミナー）	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 インクルージョンとBELONG（イギリスと日本の交流セミナー）	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
	英国	Open University	Jan Walmsley Associates